

<b>〔科目名〕</b> 卒業研究(ACB)	<b>〔単位数〕</b> 4単位	<b>〔科目区分〕</b> 演習科目				
<b>〔担当者〕</b> 江連 敏和 (Toshikazu EZURE)		<b>〔授業の方法〕</b> 演習				
<b>〔演習テーマ〕</b> この演習では、3年次からACB演習での討論内容を踏まえたうえで、青森市・青森県はじめ日本各地の地域社会の文化がどう英語圏の国々で受容されるか、また我々が外国文化をどう受け入れているのか、主にビジネス面から分析する。具体的には、学修者一人一人が設定したテーマに基づき、関連する資料の収集と自分で作成したデータを分析する。その上で、異文化受容のその上で、異文化受容の具体的な要件とは何なのか自分なりの考察を加えていく。						
<b>〔演習内容〕</b> この演習では、青森市をはじめとした地域社会と日本における英米の文化の受容と日本文化の外国における需要を、主にビジネス面から分析することを目的とする。本学の各科目で学んだ内容を土台にし、そこに自分で作成したデータに分析と論考を加えて、最終的に自分なりの結論を導く。3年次との違いとして、一連の研究活動、社会活動を通じて、グローバル社会における自分の立ち位置の確認を行うと共に、ビジネス面において、地域社会での異文化交流の在り方、そして本学卒業後に自分の英語能力と異文化理解の向上が地域社会の発展にどう寄与しうるか考える契機とする。						
<b>〔科目の到達目標〕</b> 具体的な目標として、1) 先行研究の調査、2) データ作成、整理、分析 3) 論の立て方など論理的思考を人との対話を通じて育んでいく。過去には日本の人気マンガ・アニメ、ゲームの海外でのプロモーションや商機の比較、青森市の交通システムと新たな都市計画の発展、自分の家の夕食献立から見える海外からの影響、などを自分自身が考えたテーマとして2年間を通して自律的に研究し、論文にまとめた。						
<b>〔ディプロマ・ポリシー (DP) との関係〕</b>						
学 部				学 科		
DP1	DP2	DP3 ○	DP4 ○	DP1	DP2	DP3
<b>〔前提条件〕</b> 普段から英米の文化に関心を持っていること。自分が好きなものについて客観的な見方ができること。 柔軟な思考と粘り強く人の話をよく聞き、説得する誠意を持つ意欲があること。 卒業論文をまとめ、書き上げる気力を保持し続けること。						
<b>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</b> 〔科目の到達目標〕で示した 1), 2), 3) 等の学修・研究活動を通じての成果物および演習授業内での発言や議論における貢献度、卒業論文、毎年度末に開催予定の卒業研究 (ACB) プレゼンテーションを評価材料として点数化し、合算した総合点について以下の基準で評価を行う。卒業論文は単なるページ数ではなく、熱意を感じられるか、論旨が明確であるか、論文全体の論理構成が読み手にとって読みやすいものになっているか等、Academic Writing の基礎に忠実であるかを評価基準に点数をつける。  A: 80 点以上 B: 70 点以上 80 点未満 C: 60 点以上 70 点未満 D: 50 点以上 60 点未満 F: 50 点未満						

[教科書等]	
教科書、参考書等は適宜、授業内で指示する。	
[実務経歴]	
該当なし。	
授業スケジュール	
時期	テーマと内容
第1週 から 第10週	(前期)3年次ACB演習および春休み中に深めた自分のテーマへの理解を授業内で披露、他のゼミ生と共有し、その理解が妥当であるか検討する。教員が適宜、教科書や参考資料の該当箇所を指示する。
第11週 から 第20週	(中期)卒業論文執筆の準備として、参考資料を学生各自が探し出し、それを用いて簡単なプレゼンテーションを行う。学生は各時、その週の進捗状況を授業内で説明する。他の学生は聴衆となり、その説明内容の論理構成に飛躍や矛盾等がないか活発な議論を通して確認し、互いのテーマへの理解を深める。夏季休暇中においても、自分のテーマに関連する出来事を注意深く観察しておく。余裕がある場合には、論文執筆を始めて、教員に適宜その原稿を見せる。教員はそれに対してよりよいものにするための指導や示唆を与える。
第21週 から 第30週	(後期)教員からの指導、示唆を参考にして卒業論文を完成させる。卒業論文の指導は主に論理構成や執筆ルールなど就職後のレポートや提案書の作成、大学院での研究や修士・博士論文執筆にも有用な内容を中心に行う。指導完成した卒業論文を元に、卒業研究(ACB)プレゼンテーションの準備を進める。大切なことは、プレゼンテーションの巧拙よりも、テーマに対する熱意や調査を正確に行う意思、卒業論文での内容を再現しているか、そして学問に対する真摯な態度を常に維持できているか、である。
試験	演習科目のため、定期試験は行わず、演習内での貢献度、進捗レポート、卒業論文、年度末プレゼンテーションの出来などを総合的に点数化し、成績をつける。